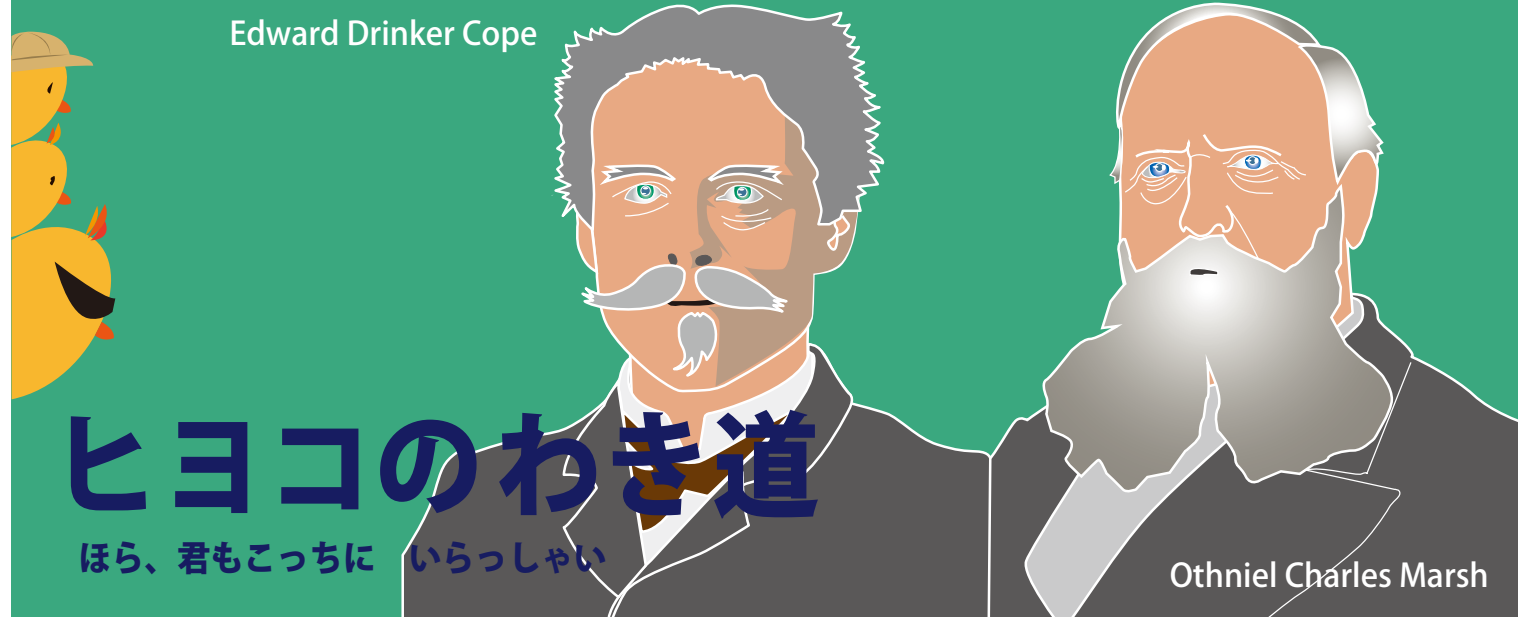


Edward Drinker Cope



ヒヨコのわき道

ほら、君もこっちに いらっしやい

Othniel Charles Marsh

第15回 ついうっかりが世界を動かす？ 化石発掘昔話

「二人の古生物学研究者：コープとマーシュ」

今回はちょっと昔の話を取り上げましょう。

とは言っても、そんなに大昔の話ではありません。恐竜も、マンモスもとつくに絶滅してしまった後の、1870年代・北アメリカ大陸西部での化石発掘に関する、ごく最近のお話です。1870年ごろは、かつて遙か太古に、現在とはまったく異なる動物達（恐竜）が生息していたことが、次第に一般にも知られるようになっていました。何しろ世界最初の恐竜化石（しかも歯の化石のみ）がイギリスで発見されたのが1820年ごろですから、それからようやく50年後の時代です。恐竜の発見は科学的にも、宗教的な面でも大きな事件でした。当時科学の最先端の話題と言えば、必ず恐竜が話題に上ったことでしょう。

さて、当時の北アメリカに裕福な白人の、2人の科学者がいました。彼らの名はコープとマーシュです。コープはフィラデルフィアの、マーシュはエール大学の古生物学研究者でした。2人とも、恐竜などの化石発掘・研究・復元に膨大な資金と時間を費やしていました。彼らは共通の研究テーマに携わっていたので、最初はある程度の親交があったのですが、やがて2人は野獣のように憎しみ合い、激しく争うことになったのです。

「争いのきっかけはうっかりミス？」

ある日、コープは新たな大型海生爬虫類の全身骨格を復元し、その成果を公表する論文を発表しました。しかし、コープの研究成果を見たマーシュは、ある重要な点に気付きました。コープは重大なミスをしていました。マーシュはそれをコープに指摘しました。

「その全身骨格の復元は間違っている。身体の前後を間違えて、頭骸骨を尻尾の先につけてある」と。そして、まさにその通りだったのです。これは確かに恥ずかしい。

現在、この標本は首長竜の一種、「エラスモサウルス」として知られています。ウミガメの胴体に、尖った乱杭歯を並べた小さな頭と、異常に長い首をつけたような、とても奇妙な動物です。この長い首を、コープは長い尻尾だと思い込んでいたと。

ところがさあ大変、コープは専門家としてのプライドを、マーシュによって無残に叩き潰されたと感じ、怒りと憎しみに打ち震えたのです。やれやれ。



「北アメリカの恐竜発掘ラッシュ？」

彼らの友情は粉々に砕け散り、新しい、より立派な化石を求めて互いに争うことになりました。2人は膨大な資金をつぎ込んで「化石ハンター」とでも呼べる人達を雇い、競って発掘に熱中しました。それは冷静に計画された調査とはとても言えないものでした。

その上コープとマーシュは、フェアな競争をするつもりなど更々ありませんでした。2人とも、相手が立派な化石標本を手に入れることなど、とても耐えられませんでした。化石ハンター達に、相手が発見した化石標本を盗むように命令し、もし盗難が不可能なら隙を見て破壊してしまえとさえ指示したのです。相手を出し抜く為ならば、どんなに汚い手でも使うつもりでした。発掘現場周辺での発砲騒ぎまであったようです。なんとか死人までは出なかったようですが。

何とも大人げない、いやヒドイ話ですが、彼らの激しい争いの結果、つい最近まで、北アメリカ大陸は最も恐竜化石の発掘・研究が進んだ場所でした。彼らがこの世を去った後に残されたのは、皮肉にも世界に誇るべき大発見の数々でした。

博物館や、今でも一般書に載っている代表的な恐竜達の何割かは、彼ら2人が激しく憎しみあい、争った結果、発見されたものなのです。それ以前、北アメリカ大陸で発見された恐竜は、わずか10種にも満たない状態でした。ところが彼らの醜い争いが終わってみれば、2人合わせて140種近い恐竜を発見していたのです。現在でも、彼らほど沢山の恐竜を発見した個人はまず居ないでしょう。

この大発見の発端といえば、マーシュがコープの間違いを指摘した、そんな小さな出来事だったのです。そして彼らの争いは、あまりにも「人間くさかった」とも言えるのでは？

「あってはならない失態、それとも本当の試練？」

さて、人間はミスをする動物だといわれます。それゆえミス防止に万全の策をとり、安全を確保しなければいけないといわれます。確かにその通りです。

しかし、本当に大きな成果や大事件のきっかけとなり、歴史の趨勢に影響を与えるのは、我々人間様の筋の通った計画的行動だけで、それだけを評価すべきなのでしょうか？

たった二人の研究者同士の憎しみと争いが、現在の自然史博物館の展示や、古生物学の発展に大きな影響を及ぼしたように、むしろ偶然のめぐり合わせや、それらに対する私たちの無関心こそが、未来を今とは似ても似付かぬものに変えてしまうのかも知れません。

そして、言葉や手順書で説明できる正しい手続きさえ踏めば、それらを全て制御できると考える態度こそ、とんでもない思い上がりなのかも知れません。間違いを指摘するにしても、それを攻め立て断罪し、世の中を真っ白な正義で塗りつぶしているだけでは、それで何が得られるのでしょうか？

平時に考え抜いて作った手順書に、あぐらを掻くなどもっての外。ミスを犯したり、想定外の予測できなかった問題が起きたときこそ、私たち「人間の本当の力」が試されているのかも知れませんか？